

美しい穂の仕上げをお手伝いします。

ブラシン剤は、いもち病と各種穂枯れ性病害、細菌性病害等の同時防除が可能です。

■：糸状菌病害 ■：細菌性病害 ※「武田植物防疫叢書 いね穂枯れ性病害」より一部の写真引用

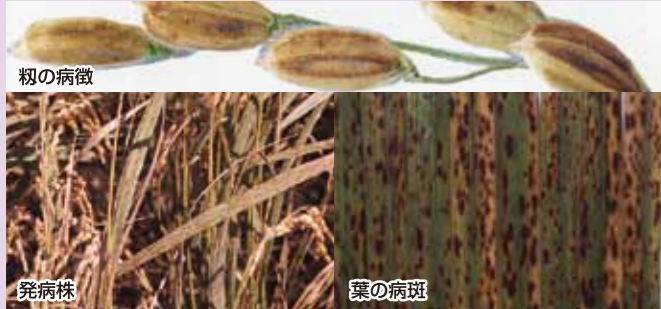
いもち病



穂いもち 1: 無処理 2,3,4: ブラシン処理による不活性病斑

穂枯れ(ごま葉枯病菌)

いもち病について米の品質を低下させる重要な病害。葉・穂軸・穂首・枝梗・みに発生し、米の品質を著しく低下させる原因となる。本菌の生育適温から西南暖地の砂質土壌や秋落田に発生が多い。種籾/被害わらで越冬し、育苗期から出穂後期、収穫直前まで発生する。下位葉の枯死部位で多量の分生胞子を形成し、感染源となる。



籾の病徴 発病株 葉の病斑

穂枯れ(すじ葉枯病菌)

西南暖地・砂質土壌や秋落田に発生が多い。本菌は気孔から侵入、潜伏期間は長く15~20日程度。出穂以降、下位葉の枯死部位で多量の分生胞子を形成する。穂首・穂軸・枝梗を侵す。穂枯れ状となり、米の品質を低下させる原因となる。



発病株 籾の病徴

稲こうじ病

収穫時に地表面に病粒が落下し越冬して伝染源となる。飛散した胞子が出穂前の葉鞘の隙間から雨や露と一緒に葉鞘内に流れ込み幼花器に侵入感染する空気感染経路と、根や葉鞘の細胞間隙から菌糸が侵入して葉の生長点に移動し、その後幼穂内の幼花器に侵入し感染する土壌伝染の二つの経路が提唱されている。被害粒の混入により、玄米を汚染して問題となる。



発病株

褐条病

主な伝染源は汚染種子。苗の葉鞘から葉身にかけて褐色の条斑が形成され、条斑は葉鞘全体に広がり枯死する。



発病苗

もみ枯細菌病

高温多湿下で穂および苗に発生する。乳熟期に罹病した籾は、基部から淡黄色化して激しく罹病すると不稔となり傾穂しない。苗で発病すると幼苗が褐変~淡褐色に変色して腐敗する。主な伝染源は汚染種子。



発病株 籾の病徴

内穎褐変病

籾の内穎が茶褐色症状を呈し、激しく罹病すると米の登熟や品質に悪影響を与える。



発病株 籾の病徴

墨黒穂病

開花中の籾に感染し、稲こうじ病と同様に、玄米を汚染し問題となる。



発病株 籾の病徴

籾の走査型電子顕微鏡写真



ブラシン処理区

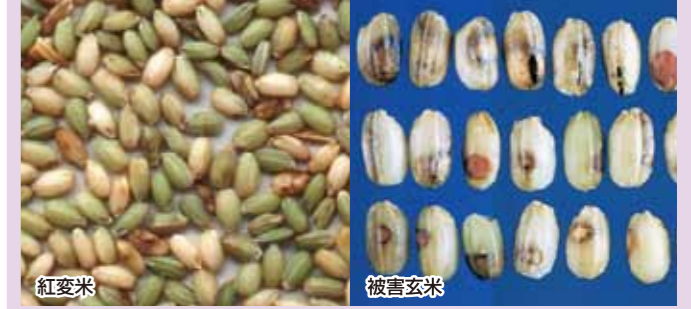
かびの菌糸発生がなく、籾表面はきれい。

無処理区

籾表面にかびの菌糸がくもる巣状にびっしりと生えて、籾を汚す原因となる。

変色米(エピコッカム菌)

主に東北や北海道に発生する。8~9月にかけて気温が低く(感染温度14~22℃)、降雨が続くと多発する。本菌は腐生生活を営んでおり、稲のほかに畦畔雑草の枯死部位で多量の分生胞子が形成され飛散、穂に落下して籾に侵入し玄米を侵す。多発すると品質・等級を著しく低下させる。



紅変米 被害玄米

変色米(アルタナリア菌)

本菌もエピコッカム菌と生活史は類似し、畦畔雑草の枯死部位で形成された多量の分生胞子が飛散し、開花中の穎内に落下して籾に侵入し玄米を侵す。病変米は淡茶米や濃茶米を呈し、品質・等級を著しく低下させる。



籾の病徴 腹黒米

変色米(カーブラリア菌)

夏期高温、特にフェーン現象によって下葉が枯れ上がると、そこに多量の分生胞子が形成され、開花中の穎の中に落下し感染、米は茶色を呈し品質を低下させる。日本海側で発生が多い。



籾の病徴 褐色米